

学位論文審査結果の要旨

氏名	佐藤 創
審査委員	主査 相引 眞幸 副査 杉山 隆 副査 土手 健太郎 副査 尾形 直則 副査 加納 誠

論文名：

外科大侵襲手術術後凝固異常における可溶性フィブリンモノマー(SF)の臨床的有用性

審査結果の要旨：

【研究内容のまとめ】

背景：可溶性フィブリンモノマー(Soluble Fibrin ; SF)は、鋭敏な凝固指標として臨床的有用性が報告され、深部静脈血栓症の診断やDICの診断において注目されている。しかし、外科大侵襲手術術後におけるその臨床的意義については未だ不明であり、申請者らは、当該科における外科大侵襲手術症例を対象に、周術期におけるSFと従来の凝固線溶系マーカーの、DIC移行予測因子としての意義を検討した。

方法：申請者らはSIRSモデルとして44例の外科大侵襲手術を対象に、後方視的検討を行った。術後経過中DICに至らなかった7例を除く37例が、術後SIRS関連凝固異常(SIRS associated Coagulopathy ; SAC)にとどまった16例とDICにまで至った21例の2群に割り付けられた。検討方法として、対象症例に対し術前・術後1・2・3・5・7・10日に採血を行い、採血項目としてはSF(ラテックス免疫比濁法)・DICマーカーである血小板・FDP・PTとし、SIRS項目(体温・心拍数・呼吸数・白血球)を検討し、急性期DIC診断基準に基づきDICスコアを算出した。

結果：術後全ての患者が術後1日目にSACに至り、DIC移行群は術後2日目にDICへ移行した。多変量解析の結果、術後1日目のSFとFDPの2因子がDIC移行群の危険因

子として他の因子に比較し有意差を認めた(オッズ比 14.4、7.8)。 β 値を用いた予測式の感度は 71%、特異度は 94%であり、臨床的に認容性があるものと思われた。これらの結果から、DIC 移行の危険因子は術後 1 日目の SF と FDP であり、とくに SF が最も強い予測因子である可能性が示され、

SF を測定することにより、手術の侵襲度を把握し、術後の凝固異常を早期に予測することが可能であり、これにより凝固異常にも配慮したよりきめ細かい周術期管理が可能になる可能性がある。

審査委員は、本論文に対し、以下の質問を行い、申請者は的確に応答した。

1. 本研究で、両群に肝硬変の有無、肝炎の有無あるいはそれら合併症に差を認めたか。
2. 炎症性サイトカインの測定は行ったか。
3. SAC と DIC の 2 つのグループの差は何が原因か。
4. D-ダイマーと比較して SF の有用性は。
5. 大侵襲後 DIC と敗血症性 DIC の差はあるか。

以上より、審査委員は、申請者が本論文関連領域に対して学位授与に値する十分な見識と能力を有することを全員一致で確認し、本論文が学位授与に値すると判定した。

(第8号様式)

最終試験の結果の要旨

氏名	佐藤 創
審査委員	主査 印
	副査 印

実施年月日

平成27年2月8日

試験方法（該当のものを○で囲むこと。）

口頭 筆答

試験結果の要旨

申請者は、愛媛大学大学院医学系研究科に在学中であり、所定の単位を修得している。平成28年2月8日に開催された公開審査会において、申請者は、提出論文内容の発表をすべて英語で行った。その後の質疑応答は日本語で行い、提出論文の内容及び関連領域に関する別紙に示す様々な質問に対し明確に応答し、学位授与に値する十分な見識と能力を有すると評価し、最終試験に合格と判定した。